

日々の看護管理への気づきに富んだ 生きた参考書

[評者] 宮井千恵 高知大学医学部附属病院看護部長

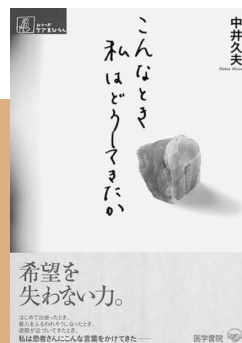
シリーズ ケアをひらく こんなとき私はどうしてきたか

中井久夫 著

A5 判, 240 ページ

定価 2100 円 (本体 2000 円 + 税 5 %)

医学書院 TEL. 03-3817-5657



■統合失調症患者が回復するまでの長い道のり どう関わるか

“こんなとき私はどうしてきたか”というタイトルを見たとき、その書名から、本を開いて見てみたいという興味が湧いてきました。一方で、精神科の患者さんについて書かれた本であることから、苦手意識を感じたものの、読むにつれて引き込まれ、内容のリアルさから一気に読み終えてしまいました。

主に統合失調症の患者さんが病気になってから回復していくまでの長い道のりで、患者さんに表面的に現れる症状や内面の心の動きに対して、医師や看護師がどのように受け止め、関わっていったらいいのかということが、著者の経験と専門的な知識を駆使して読み手の心に届くよう書かれています。

本書は大きく分けて4つにくくられています。まず1つ目は、患者さんと出会ったときの関わり方として、初めて精神科を受診したときこそが大事であること、“希望”を処方するということ、そして幻聴について、症状と対処の仕方があたかも自分がその場に居合わせているかのようリアルに書かれています。2つ目は、患者さんの暴力にどう対応していくか、また暴力を起こさない対応の仕方などについて。3つ目は、病棟運営の方法について。部屋割りの仕方や同室患者さん同士の影響力、病棟スタッフがどうあるべきかなどについて、深みのあるヒントが語られています。4つ目は、病気の回復期について、患者さん自身がどのように自分を感じ、回復のいろいろな段階をどのように乗り越えていっているのか、また家族

の理解も不可欠であるといったことが、手に取るようにわかります。

■現場の問題人の解決の糸口を見つけるために

筆者は精神科看護の経験はありませんが、看護管理者として、看護の基本である患者さんをよく観察し、よく聴くということが一番大事であると感じました。そして、患者さんを観察するときの姿勢として患者さんに寄り添うということが大切であり、そうするためには、患者さんの思っていること、生育歴、生活環境などを理解しておく必要があります。そのうえでなければ、よく観察することもよく聴くこともできませんし、信頼関係を築いていくことも難しくなります。

さらにそうしたことの裏付けとなる専門的知識が不可欠だと思います。これは精神科に限らずすべての領域の患者さんに対して言えることであり、知識・技術・態度を磨いていくことです。病棟運営のあり方についても病室の構造的環境、人的環境を配慮することの大切さ、医師と看護師のチームワークがいかに重要かなどについて気づかされることが多くあり、参考になりました。

本書は、看護師はもちろん研修医にも役立つと思います。精神科病棟の看護師には患者さんとの関わりなかで、現場で直面している多くの問題について解決の糸口を見つけるための生きた参考書になります。精神科だけでなく、一般病棟の看護師にも精神疾患を理解するためにぜひ読んでほしいと思います。また、平易なことばで書かれていますので、患者さんやご家族の方でも理解が深まると思います。特に現場の看護師の皆さんには、急がずに丁寧に読み込んでほしい一冊です。